

大学外の弓道場で練習を重ね 大会はすべてリモートで参加

このコロナ禍で都市大の課外活動は幾度も活動制限がなされ、弓道部もここ2年はなかなか思うような練習ができませんでした。またキャンパス再整備事業に伴い、かつて世田谷キャンパス内にあった弓道場がなくなってしまったのも部にとっては大きな痛手でした。「先輩たちが掛け合ってくれたおかげで、今は東京都市大学等々力中学校・高等学校の弓道場を週に2～3回ほど使わせてもらっています。とてもありがたいことです。そのほか駒沢オリンピック公園にある弓道場でも練習しています。こちらは他大学や一般の方も使用するため、予約を取るのに毎回苦労しています」(原さん)。ちなみに会計を担当した岩崎幹也さんによると、駒沢オリンピック公園など外部の弓道場を借りる場合、1回あたり9500円～1万3000円程度の利用料がかかるとのこと。「だから回数がかさむと部費だけで賄うのはなかなか大変。部弓会(OB会)の皆様の支援があるからなんとかやれている感じです。この場を借りてお礼を申し上げます」(岩崎さん)。

厳しい状況下でもしっかり団結し、多くの新入部員を勧誘

対面での大会と同じく、部員たちが再開を切望しているのが合宿です。以前は夏に六泊七日、冬に五泊六日の合宿を実施していました。「僕らは1年生のときに2回とも参加できたのですが、後輩たちは一度も合宿を経験していません。個々のスキルアップはもちろん、部員同士の結束を強めるとてもいい機会となっていましたので、いつかまたいけるようになるといいですね」(岩崎さん)。

とはいえ現在の弓道部もしっかり団結しています。2021年は新入部員の勧誘にもメンバー一団力を合わせて臨みました。「春の段階で3年生が16人、2年生が4人しかいなかったのですが、監督からも新入部員の勧誘を期待されました。オンラインで行われる学団連主催の課外活動団体説明会には、すべて参加したほか、SNSなどを駆使してやれる限りのことはしました。おかげで今年度は8名の新入部員が入部。欲を言えばもう少し入って欲しかったのですが、来年に期待します」(原さん)。次期部長の許斐さんはこれに応じて次のようにコメント。「先輩たちが繋いできた歴史が途絶えないよう、新入生の勧誘はも



2020年の春合宿の風景。部の結束を強めるいい機会でしたが、コロナ禍以降、合宿は一度も実施されていません。

弓道部が出場する大会は、密を避けるため、現在すべてが大学ごとに用意した会場をzoomなどで結んで行うリモートでの開催となっています。リモートの場合、日程に合わせて弓道場を確保する必要があるほか、会場の所定の位置に正しくカメラを設置しなければならないなど、なかなか準備が大変なようです。女子主将を務めた西根千晴さんは次のように語ります。「不正がないように、対戦校とお互いを画面上でチェックしあって試合は進みます。だから緊張感はあるのですが、対戦相手と同じ場にはないのはやっぱり不思議な感じがします。早く今までのような大会ができるようになってほしいです」。

もちろん、日々の練習にも一層身を入れて頑張りたいと思います。現在は男女とも関東学生リーグの4部に所属していますが、目標は3部リーグ昇格です」。

そう語る許斐さんの姿を頼もしそうに見つめる先輩3人の姿から、弓道部の絆の強さや普段の和気藹々とした雰囲気がかがえました。弓道は生涯スポーツと言われますが、この部で生涯変わらぬ仲間たちと巡り会えたことも彼らにとっては大きな収穫だったようです。



2021年秋の引退式の際に撮影した集合写真。先輩たちの熱い思いを、後輩たちがしっかり受け止めました。